



人口減少社会と 地方都市の活力再生

175

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
席員
主研究員



19 縮小する社会と地方都市の将来像

景観まちづくりの根幹をなす具体化例の一つである『街並』の狭義の実例を長野市であげるならば、それは「歴史的連続性を感じられる街並」である。

一般的見解として、日本においては近世から継承された伝統的街並は今や絶滅危惧種の体をなしていると言っている。

しかしながら、この歴史的連続性とはけっして過去の先人の残したレガシー（遺産）ではなく、現在を未来に引き渡す大切なレガシーでもある。これを実行していくためには、発想を転換し、制度設計、そして時により価

値観までも変革していく強い意志と大転換が必要であり、このことが景観づくりの王道となり得るものと考えているのである。

このように、これらの時代は都市の『質』が問われ、選ばれゆく時代となる。

確かに歴史的にみれば、日本の都市は今日に至るまで国際的イベントを誘致すること、それを国民の総意とし、心の寄り処として発展し膨張してきた節がある。これは都市構造の変遷のみならず、全ゆる経済活動においても然りである。

おりしも、今年は東京五輪・パラ五輪の開催年。しかしながら、この大イベントが終焉を迎えると暫らくの間それに代わるものは見当たらない。それどころか、日本という国の足元を見るとこれから10年は人口減少の拍車期と重なり、極めて深刻な状況を迎えるであろうことになる。

それは、まさに『人口減少との戦い』であるともいえる。つまり、都市をそれに合わせて縮小し、選ばれる―生き残る―に値する都市に再生していく、ということである。

昨今、日本の最大手

自動車メーカーの社長の発表による『スマートシティ構想（自動運転など未来志向のテクノロジーを大胆に活用し、生活者に利便性を提供する実験都市を造るというもの）』もその1つといえる。あらゆる機能を組み合わせ実用化実験を推進する、いわばハイブリット都市への挑戦である。

これも、よくよく考えてみると皮肉な話である。日本においては、1960年代中葉から自動車の急速な普及に押されるように都市政策は構築され、推進された。それによって郊外の開発に拍車がかかるとともに人口は外へ流れ、その結果現在の「外延性都市構造（ドーナツ構造）」が誕生し、徐々に中心市街地の空洞化が進行したのである。（続く）

清水 秀幸氏（しみず ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商會役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在、同研究所社長。